

編 集 後 記

“科学もやはり頭の悪い命知らずの死骸の山の上に築かれた殿堂であり、血の川のほとりに咲いた花園である。”これは、著明な物理学者、随筆家の寺田寅彦博士の“科学者とあたま”の中の一節です。青空文庫で全文が見られますので時間が在ればお読み下さい。この随筆で氏は、“頭のいい人には恋ができない。恋は盲目である。科学者になるには自然を恋人としなければならない。自然はやはりその恋人にのみ真心を打ち明けるものである。科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者の頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。”とも述べています。

臨床医学では、本来失敗は許されません。しかし、我々は失敗するかしないかの所を常に歩んでいるのが実際です。症例報告は、失敗しそうな状況をなんとか乗り切った経験の報告とも言えるでしょう。医学は不確実な事象の積み重ねであり、その不確実性の中で、最適解を見出す努力を日々積み重ねた結果の経験則による学問です。その意味で、一人の失敗経験には限りがあり、他者の臨床報告から学ぶことは多いと思います。目の前の症例が報告する価値があるかどうか考えると、こんなことをわざわざ思うかもしれません。しかし、後世から見れば、今の我々の診療の多くは乗り越えられていくべき、こんなことをとい

う物なのです。本誌は、今の我々の“日々の効率の悪い仕事の歴史を積み重ね、その血の川のほとりにいつか咲くであろう花園”の糧となる場と考えています。是非、皆さんと私達の“錯覚と失策の歴史”を記録に残して頂きたいと思います。

寺田寅彦は更にこう綴っています。“研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけない。きっと前途に重畳する難関を一つ一つしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせつかく楽しみにしている企図の絶望を宣告されるからである。”本誌の査読にあたり、できるだけ、楽しみにしている企図の絶望を宣告しないよう心がけています。

私は、この随筆を、故中野今治先生から教えて頂きました。神経病理学者としても、臨床家としても著明な中野先生が、この想いを胸にされ、日々お仕事に臨まれていらっしゃるかと考えますと改めて襟を正します。先生は、本誌の編集長も永年勤められました。先生が、今も、本誌が、臨床神経学に恋をしている諸氏の想いを受け止めるようお願いしていらっしゃるかと推察し、そのご意志を継いでいきたいと考えています。皆さんからの投稿をお待ちしています。

(小野寺 理)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡 古賀 政利
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

「臨床神経学」 第59巻 第11号 2019年11月1日発行
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 戸田 達史
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>